

# 中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会  
有限会社橘地所  
技研コンサル株式会社



# 中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会  
有限会社橘地所  
技研コンサル株式会社



## 例　　言

- 本書は宅地造成工事に伴う「中泉十王堂遺跡3」（市遺跡調査番号742）の発掘調査報告書である。
- 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、有限会社構地所の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。
- 本調査および整理作業は高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと、技研コンサル株式会社が実施した。
- 発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。

遺跡所在地　群馬県高崎市中泉町字十王堂99番地1  
監理指導　高崎市教育委員会  
調査担当　中村岳彦（技研コンサル株式会社）  
発掘調査期間　平成30年4月18日～5月22日  
整理作業期間　平成30年5月28日～8月30日  
調査面積　18295m<sup>2</sup>  
発掘調査参加者　曾根裕　秋山修　新井實　桝原義久　遠藤好則　加藤知恵子　鶴田栄作　北爪二郎  
桑原襄　今野妙子　設樂和男　田部井美砂子　山口直子  
整理作業参加者　大川明子　福島様子　安藤三枝子　岡田萌　河本ちさと　杉田友香　田所順子  
南雲富子　細野竹美

- 本書の編集は中村が行い、執筆はIを矢島が、他を中村が行った。
- 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会で保管されている。
- 発掘調査および報告書の作成にあたり下記の諸氏及び機関に有益な御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同、敬称略）

永井智教　西川利　能登健　日沖剛史　山本杏子　山下工業株式会社

## 凡　　例

- 全体図および遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅷ系を使用している。本文および図中では下三桁を表記している。
- 挿図に国土地理院発行1/25000『前橋』『下室田』、高崎市発行1/2500都市計画図を使用した。
- 土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修）に掲げる。
- 掲載図面の縮尺は、全体図は1/120、遺構図は1/60・1/80とし、図中にスケールを示した。
- 遺物実測図及び拓影図の縮尺は土器は1/4、石器は1/1を基本とし、図中にスケールを示した。
- 本文および表中の計測値については〔 〕は現存値を、（ ）は復元値を表す。
- 遺物写真図版は1/3に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に（ ）で示した。
- 遺物実測図、遺構図のトーン表現は以下のとおりである。

構築面（基本層序V層以下） 須恵器断面

- 主な火山灰等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間A軽石：1783年）、As-B（浅間B軽石：1108年）、As-C（浅間C軽石：4世紀初頭）、  
Hr-FA（様名ニツ岳洪川テフラ：6世紀初頭）

## 目 次

|              |    |                  |    |
|--------------|----|------------------|----|
| 例言・併用        |    |                  |    |
| I 調査に至る経緯    | 1  | (3) 方形堅穴状遺構..... | 11 |
| II 調査の方法と経過  | 1  | (4) 土坑.....      | 12 |
| III 遺跡の立地と環境 | 2  | (5) ピット.....     | 12 |
| 1 地理的環境      | 2  | (6) 倒木痕.....     | 15 |
| 2 歴史的環境      | 3  | (7) 遺構出土遺物.....  | 16 |
| IV 基本層序      | 6  | VI 発掘調査の成果と課題    | 17 |
| V 検出された遺構と遺物 | 7  | 1 古墳時代前中期の墓と樹木   | 18 |
| 1 調査概要       | 7  | 2 古代の用水路         | 19 |
| 2 遺構・遺物      | 7  | 写真図版             |    |
| (1) 潟        | 7  | 報告書抄録            |    |
| (2) 墓        | 11 |                  |    |

## 挿図目次

|                  |    |                       |    |
|------------------|----|-----------------------|----|
| 第1図 調査区位置図       | 2  | 第10図 1号土坑             | 14 |
| 第2図 周辺道路図        | 3  | 第11図 1~13号ピット         | 15 |
| 第3図 調査区全体図       | 5  | 第12図 1号倒木痕            | 15 |
| 第4図 基本層序とトレンチの位置 | 6  | 第13図 出土遺物             | 16 |
| 第5図 1・2・4~6号溝    | 9  | 第14図 1号墓の残存状態         | 17 |
| 第6図 3号溝          | 10 | 第15図 1号墓と根系の相関関係      | 18 |
| 第7図 1・2号墓(調査区南部) | 12 | 第16図 Hr-FA 降下における溝の変遷 | 19 |
| 第8図 1・2号墓(調査区北部) | 13 | 第17図 3号溝の流路想定         | 20 |
| 第9図 1号方形堅穴状遺構    | 13 |                       |    |

## 表 目 次

|             |    |                               |    |
|-------------|----|-------------------------------|----|
| 第1表 周辺道路一覧表 | 4  | 第3表 周辺道路における墓の帆船と植物柱體比較(古墳時代) | 17 |
| 第2表 出土遺物観察表 | 16 |                               |    |

## 写真図版目次

|                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| PL.1 調査区全貌 奥に椎名山(南東から)     | PL.3 6号溝 完掘状況(北東から)   |
| 調査区全貌(北から)                 | 1・2号墓 完掘状況(北から)       |
| PL.2 1号溝 完掘状況(東から)         | 1・2号墓 完掘状況(北西から)      |
| 2号溝 完掘状況(南東から)             | 1号土坑 完掘状況(北から)        |
| 3号溝 完掘状況(北東から)             | 1号方形堅穴状遺構 土層断面(北から)   |
| 3号溝剖面 完掘状況(北東から)           | 1号方形堅穴状遺構 完掘状況(北西から)  |
| 3号溝 土師器壙(12図9) 出土状況(北東から)  | 7号ピット 土層断面(南から)       |
| 3号溝 土師器壙(12図15) 出土状況(北東から) | 8号ピット 土層断面(東から)       |
| 4号溝 完掘状況(東から)              | PL.4 13号ピット 掘出状況(東から) |
| 5号溝 完掘状況(東から)              | 発掘調査風景(北東から)          |
|                            | 出土遺物                  |

## I 調査に至る経緯

平成30年3月、土地所有者染谷薫氏と工事施工業者有限会社橋地所から、高崎市中泉町において計画している宅地分譲用地の開発に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中泉十王堂遺跡に隣接し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年2月19日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年3月7日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代の畠跡等の遺構が検出され、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「中泉十王堂遺跡3」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年4月18日に有限会社橋地所と民間調査機関技研コンサル株式会社との間で契約を締結、また同日に有限会社橋地所・技研コンサル株式会社・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

## II 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果に基づき、道路部分を対象に行った。調査面積は182.95m<sup>2</sup>である。座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用している。

発掘調査は、平成30年4月18日から開始し、初日は重機搬入路の確認や近隣住民への挨拶回りを行った。19～24日にかけて、測量基準点の設置や調査区の設定などの準備を行い、雨天を挟んで26日に表土除去を行った。表土除去は0.25m級バックホウを使用し、調査区の北側から南側へと順次展開した。表土除去はまず、バックホウでAs-C混入黒色土層に相当する基本層序IV層まで行い遺構確認に努めたが、IV層の堆積はまだらで、II層土の耕作痕による擾乱が著しく、また周辺遺跡の調査記録からIV層土を覆土とする畠の存在が予想されたことから、人力でIV層土を5～10cm程度一律に掘り下げ、最終的に淡色黒ボク土との漸移層であるV層上面を遺構確認面とした。27日には遺構確認を終え、28日から遺構調査を開始した。基本的には、遺構掘り下げ→セクション図化・写真→遺物出土状況図化・写真→完掘状況写真の手順で調査を行った。5月14日には全景写真撮影を行い、15日には終了確認が市教委により行われた。終了確認後、確認面としたV層以下の遺構と遺物の有無を確認するため、調査区中央に2本のトレンチを設定し、総社砂層の漸移層に相当するVI層まで掘り下げたが遺構は確認できなかった。また、総社砂層に相当するVI層以下の基本層序を確認するため、調査区中央に1.5m四方の深掘りを行った。18日にはトレント調査を終了し、21～22日にかけて機材の搬出を行い、現地調査を終了した。測量は、電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行い、オルソフォトによる写真測量も併用した。遺構写真の記録には、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/PRESTO・ISO400/PROVIA・ISO400）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・EFS18-135mm）を用いた。

整理作業は平成30年5月28日から開始した。土器の実測における断面形の計測と外面調整の描画には3Dスキヤナ型三次元測定機（KEYENCE VL-300series）を活用した。なお土器の断面形に関して本書では、器壁の荒れがひどく器形の特徴を捉え切れなかった1点の土器を除き、観察による点検を経た上でほぼそのままにスキヤナのデジタルデータを掲載している。遺物写真的記録にはデジタルカメラ（CanonEOS 5 D・EF200mmL）を用いた。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に際してはDTPの手法を用いた。8月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

### III 遺跡の立地と環境

#### 1 地理的環境

中泉十王堂遺跡3は、高崎市中泉町字十王堂99番地1に所在する。2006年に高崎市へ編入する以前は群馬郡群馬町に属していた。遺跡の150m東には、高崎と渋川の市街地を結ぶ主要地方道である高崎・渋川線（県道25号線）が南北に直通する。その道端には古くから小売店が軒を連ね、町並みが大型店舗やチェーン店に移り変わった今も活況を呈する。ゆえに遺跡周辺は市街化しているが、大通りを一步裏へ入ると、そこには宅地と畠地が閑静な景観を留める。ごく最近、前橋と富岡を結ぶ予定の西毛広域幹線道路がこの大通りに接続し、これまでの南北の往来に加えて東西の利便性も増し、宅地や畠地の一帯には、再び新興の住宅地が増えつつある。

本遺跡は、榛名山の山麓扇状地である相馬ヶ原扇状地の扇端部に立地する。相馬ヶ原扇状地の形成は、約1.7万年前に榛名山の山崩れで生じた陣場岩屑なだれを契機に始まる。その扇頂部に端を発して表層を流れる唐沢川や染谷川などの中小河川は、形成の過程で何度も大規模な洪水を起こし、地表を削り、谷を埋め、流れを変えでは再び侵食と堆積を繰り返すことによって、縄文時代前期頃までには總社砂層と呼ばれる硬質の砂層を一帯に厚く堆積させ（早田1990）、その厚さは本遺跡でも22m以上に達する。これらの中小河川は、その後の歴史時代でも、榛名山や浅間山の噴火による火山灰や軽石などビテフラ（火山碎屑物）の堆積を契機に氾濫し、一帯に泥流や土石流を起こして、それぞれの時代に生きた人々の営為を翻弄してきたのが、一方でこれらの堆積物は、遺跡として残りにくい田畠の痕跡までもを地表下に留め、昔の人々の生業を現在の我々に垣間見せてくれる。

また、このような暴れ川であった唐沢川や染谷川、扇央部を水源とする天王川に加えて、「井出」「中泉」「水窪」「冷水」などの地名に残る扇端部湧水点の水利に頼らざるをえないこの土地は、潜在的な貧水地帯であり、このことは本遺跡の形成にも少なからぬ影響を与えると考えることができる。



第1図 調査区位置図

## 2 歴史的環境

本遺跡は、唐沢川と天王川に隔たれた南北に細長い微高地に立地する。唐沢川より西は、本遺跡周辺と対照的な水田地帯であり、大型前方後圓墳である保渡田古墳群（トーリ）や豪族居館の三ッ寺Ⅰ遺跡（38）に、ある段階の結実を見る水利社会の展開過程には、若狭徹氏をはじめ（若狭 2007 など）厚い研究史がある。また天王川より東は、本遺跡周辺に似た貧水地帯だが、奈良時代に上野国府や国分寺の隣接地域になることで、当地とは異なる地域史的展開がみえる。そこで本節では、この唐沢川と天王川で画される小地域の遺跡を概観する。

先述のように、縄文時代前期頃まで扇状地の堆積作用が強く影響した本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は、わずかな遺物の出土を除いて、ほとんど確認されていない。縄文時代前期以降も扇状地は不安定な環境だったのか、椎原現Ⅱ遺跡（7）などで中期の小規模な集落が調査された程度である。本遺跡や三ッ寺・七窓遺跡（4）には倒木痕があり、転倒時に巨大な根鉢を形成するブナ類やカシ類のような、浅根集中型の根系をもつ大木（苅住 1979）が林立していたのかもしれない。

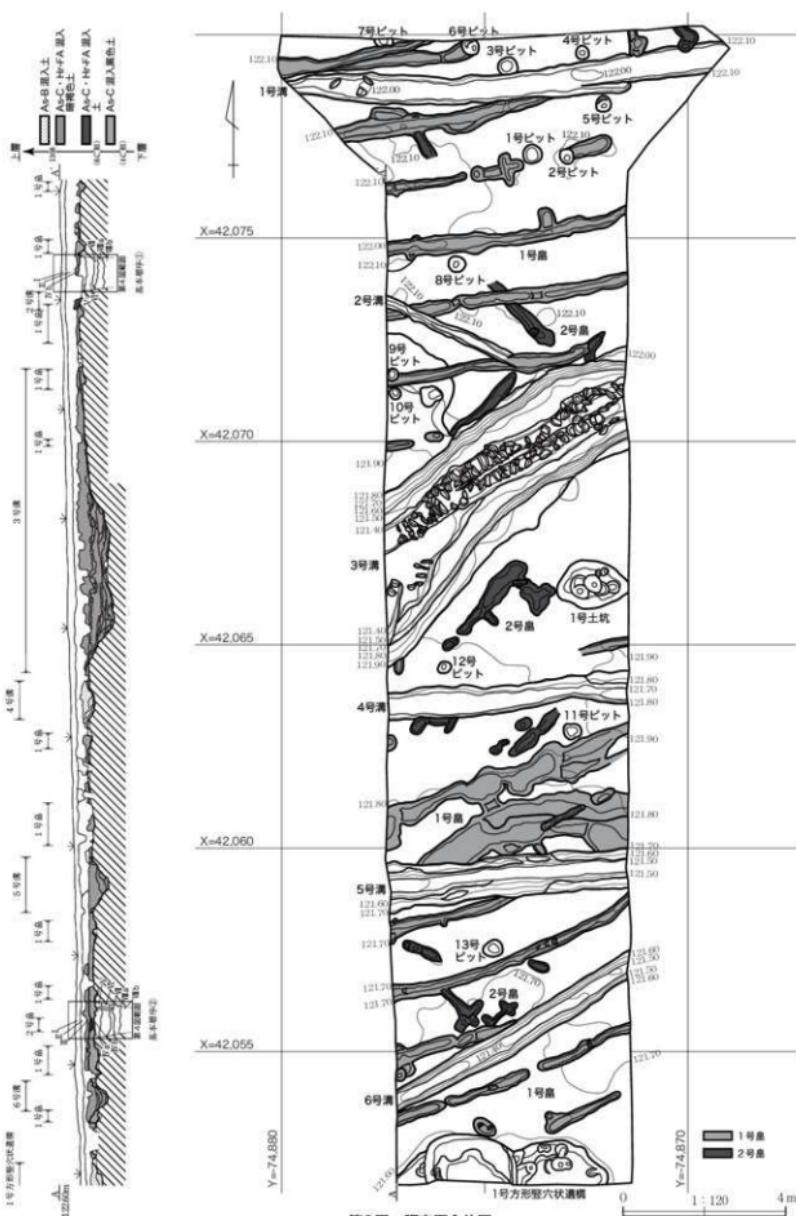
弥生時代中期後半になると、南部の雨壺遺跡（14）や大八木・伊勢廻遺跡2（15）に遺跡が分布し、後期に続く。扇端部湧水を水源とする猿府川下流域の両岸では、西浦北遺跡、雨壺遺跡、大八木熊野堂遺跡とその周辺（14・15・47～49・52・53・56・57）で、後期の住居跡と水田と方形周溝墓が一体的に分布し、湧水の小さな谷を農業基盤とした営みが見える。同じ傾向は天王川下流域の諸口遺跡（10）や小八木志志貝戸遺跡（71）にもいえる。

古墳時代前期になると、猿府川下流域の遺跡は南端に集約し、大八木熊野堂Ⅱ遺跡（56）に前方後方形周溝墓を造営するが中期に継続せず、天王川下流域でも同様である。該期はAs-Cの火山災害に直面しており、その事態が遺跡の分布を変化させる一要因となった可能性はある。本遺跡1号畠や中泉十王堂遺跡（2）の住居跡群は該期の終わりに營まれ、災害は収束していくだろうが、やはり現状では中期に継続しない。該期の遺跡は保渡田Ⅶ遺跡（28）など唐沢川以西の小地域に多く、やがて保渡田古墳群や三ッ寺Ⅰ遺跡が中期後半に成立する。その農業基盤として、本来は中島川を介して天王川へ流れた唐沢川（B）を、現在の流路へ付け替えた可能性が保渡田遺跡（17）や保渡田東遺跡（25）の調査や旧地形のボーリング調査から指摘されている（能登 1990）。中道遺跡（16）のボーリング調査では該当する旧地形は確認されないが、仮に付け替えを推定すると、本遺跡の小地域が南北に細長い貧水地帯として認識できる背景には、人為的な要因が深く影響する可能性もある。このような経過もあってか



第2図 周辺遺跡図

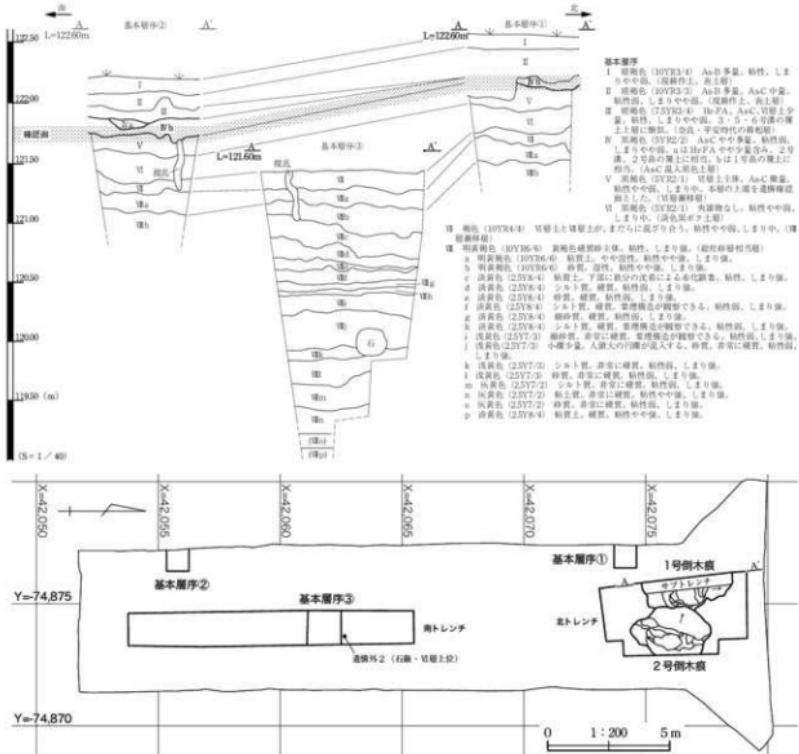




第3図 調査区全体図

## IV 基本層序

基本層序は、調査区西壁の北部と南部、調査区中央の3地点で観察した（4図）。Ⅲ層はAs-Bを含まず、以下の層序の粒子やブロックが攪拌された状態で含まれ、古代の溝の覆土上層に類似することから、古代の耕起層と判断できる。表土層のI・II層による削平を免れた調査区南部で部分的に分布する。Ⅳb層はいわゆる「C黒」と通称されるAs-C混入黑色土層で、ほぼ全域に分布する。直下で確認できる1号畠は、この土を畠間溝の覆土とし、「C黒」との分離は困難である。また、古墳時代後期以降の調査は通常この層位を遺構確認面とするが、今回の調査では隣接地点の調査成果からⅣ層を覆土とする遺構の存在が予測されたため、この直下でVI層との漸移層であるV層上面を遺構確認面とした。遺構確認面の傾斜は南へ緩やかに下る。VI層は淡色黒ボク土に相当すると判断できる。ごく少量の繩文土器片や石器を包含する。Ⅶ層はⅥ層への漸移層で、下位ほど黄褐色砂質土を多く含み黄色味を増す。古墳時代以前の遺構の有無を確認するために掘削した南北2本のトレンチは、この層位を遺構確認面とした。Ⅷ層は黄褐色の硬質な砂質土で、粘質・シルト質・砂質の細分層が互層を成し、層によつては葉理構造が発達したり、人頭大の円礫が混入する。堆積が厚く、以下の層序は確認できなかったが、周辺遺跡での地質の分析から、この層は總社砂層に相当すると判断できる。表土下3.0mに達するⅨp層で、土中の湿気が滲み出す程度のわずかな湧水を確認した。



第4図 基本層序とトレンチの位置

## V 検出された遺構と遺物

### 1 調査概要

中泉十王堂遺跡3（以下、「本遺跡」）は、中泉十王堂遺跡（以下、「一次調査」）の西側約30mに隣接する。これら2つの調査地点は同一遺跡の別地点と判断でき、各時代の溝やAs-C混入黒色土を畝間溝の覆土とする畠は、連続性をもって分布している。しかし一方で、一次調査で確認された古墳時代前期の堅穴住居跡群は分布していない。

本遺跡では、弥生時代以前の倒木痕2箇所、古墳時代の溝2条、畠2箇所、土坑1基、ピット13基、飛鳥～平安時代の溝2条、方形堅穴状遺構1基、中世以降の溝2条を調査した。遺物は、3号溝から土器類や須恵器がある程度まとまって出土したが、分布する遺構の性格もあってか全体的に希薄で細片が多く、出土量は遺物収納箱に2箱程度である。しかしながら、現地表では比較的多くの土器片が表採できることを考えると、現代の耕作によって深度の浅い遺構は埋没している可能性もあるだろう。

### 2 遺構・遺物

#### （1）溝

**1号溝**（第5図、PL. 2） 位置 調査区北端部。（X = 42.079、Y = -74.869～-74.880）重複 1・2号畠、3号ピットより新しい。走向方位 N-86°-E。規模 検出長 [11.02] m、上幅0.35～0.75m、下幅0.18～0.54m、深さ0.10m。底面の標高は東端で122.02m、西端で122.05m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土はAs-Bを含む。出土遺物 覆土中から土器類やS字状口縁台付甕、绳文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

**2号溝**（第5図、PL. 2） 位置 調査区北部。（X = 42.072～42.074、Y = -74.874～-74.877）重複 1号畠より新しい。走向方位 N-66°-W。規模 検出長 [3.64] m、上幅0.21～0.35m、下幅0.05～0.19m、深さ0.13m。底面の標高は北西端で122.02m、南東端で121.97m。形状等 北西～南東方向へ直線的に走向し、北西端は調査区外、南東端は徐々に浅くなり消失。断面は弧状。底面は南東端に向かってわずかに傾斜する。覆土はHr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

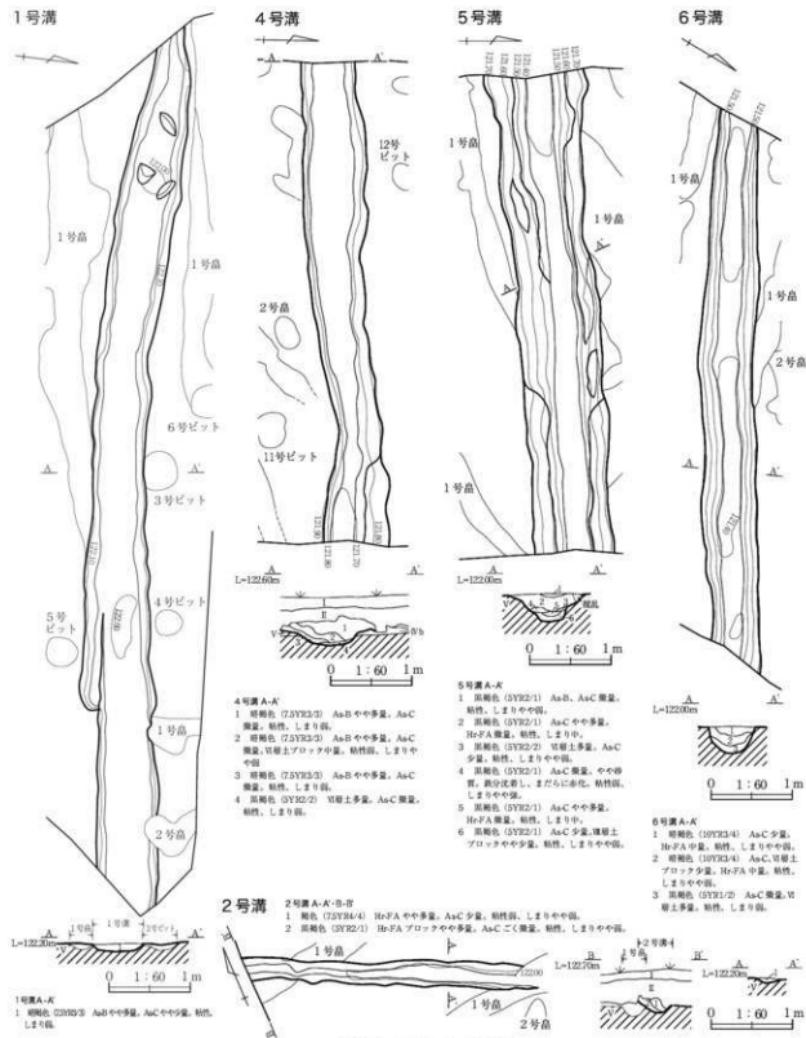
備考 覆土は2号畠に類似するが、走向方向と断面形状が異なるため、溝と判断した。

**3号溝**（第6・13図、PL. 2・4） 位置 調査区中央部。（X = 42.064～42.072、Y = -74.871～-74.877）重複 1・2号畠、9・10号ピットより新しい。走向方位 N-52°-E。規模 検出長 [9.53] m、上幅2.36～2.77m、中段幅2.23～2.36m、下幅0.26～0.34m（旧段階）・0.22～0.35m（新段階）、深さ0.72m（旧段階）・0.65m（新段階）。底面の標高は北東端で121.35m、南西端で121.23m。形状等 東から南西に向かって緩やかに曲がりながら走向し、両端は調査区外、断面は不整形なU字状。底面は南西端に向かってわずかに傾斜する。土層断面と底面の掘削痕列2条から再掘削を伴うと判断でき、新旧2段階に大別できる。旧段階は断面A-A'の19～28層、B-B'の18～28層が相当し、南壁際に沿って走向する。底面には規則的な掘削痕列が残るが、地点によっては、VI層とVII層が粗く攪拌されて反転したかのような地山の土塊が、耕作痕の覆土となっており（B-B'の28層）、これは掘削時の残土が完全には排土されずに取り残されたためと判断できる。掘削痕列は南西部の調査区西壁際付近ではあまり観察できず、この部分は底面の形状が不規則に乱れている。旧段階の覆土はHr-FAやAs-Cを含みAs-Bは含まない。下層には砂の堆積が観察できた（A-A'の28層、B-B'の27層）。また、壁面の崩落と判断できる地山ブロック土の流入層が、南壁際で顕著に観察できた。以上の点から、旧段階の溝は流水による侵食と堆土を受けていると判断できる。ただし、底面の傾斜度や掘削

痕の残存状態、堆砂層の状態から、流勢はさほど強くなかっただろう。新段階は、断面 A-A' の 1 ~ 18 層、B-B' の 5 ~ 17 層が相当し、旧段階の北側に重複して再掘削されている。掘削痕や覆土の状態は旧段階と同じで、緩やかな水の流れがあったと判断できるが、堆砂層は下層以外にも 2 面観察でき、数度の流水の影響を受けながら徐々に埋没したものと判断できる。また、北壁西寄りの上端はテラス状に浅く窪み、覆土は溝の上層と連続するが (B-B' の 6 層)、底面に硬化面などは観察できなかった。なお、最上層には B-B' の 2 ~ 4 層がブロック状に乱れて堆積しており、埋没がほぼ完了して窪地化した本跡の底面を耕起した痕跡と判断できる。出土遺物 溝跡としては多くの遺物が出土した。底面直上～下層と上層からの出土量が多く、細片が多いがある程度形を残す遺物も少量含む。S 字状口縁台付壺や内斜口縁杯など、古墳時代前～中期の土器片を少量含むが、これらは細片で出土層位もまちまちであり、周囲に分布する遺構群からの流入と判断できる。量的な主体は、底面直上～下層では、いわゆる“北武藏系”的範疇にある、小径化と稜部の退化が顕著ないわゆる“鬼高式”的模倣壺と、丸底で口縁部が後をもたず内屈するいわゆる“真間式”的壺にあり、上層では平底気味で口縁部の外傾が強くやや扁平な在地産暗文杯、口径底径比が大きく高台が高い須恵器高台付壺にある。また全体的な器種組成に偏りがあり、供膳具が多く煮炊具が極めて少ない点は特徴といえる。第 13 図には、本跡に特徴的な遺物と残存率の高い遺物を示した。12 ~ 16 は旧段階の底面直上から出土した。12 の高台付壺は口径底径比が小さく、低い高台が底部外縁の内側に貼付されている。13・14 はいわゆる“真間式”的壺で、13 は体部外面のヘラケズリが口縁部直下までおよび口縁部が鋭く内屈し古相を示すのに対して、14 は体部外面の上端に最終調整が施されず口縁部は緩く内屈し、本跡出土の同系統の壺では新相を示す。15・16 は模倣壺で、小径化と稜部の退化が顕著で同系統の壺では終末的な形態を示す。7・9 は旧段階の下層から出土した。7 は盤で口縁部と底部の境に棱をもつ。9 は体部外面の無調整範囲こそ限定的だが 14 と同型式と判断できる。8・10 は新段階の下層から出土した。8 は大型の壺で外面に焼成前のヘラ記号らしき線刻が観察できるが判然としない。完全な還元雰囲気では焼成されておらず表面は橙色を呈する。10 は 15・16 と同型式と判断できる。5・6・11 は中～下層で出土したが厳密な層位は記録していない。5 の壺蓋は小径化と稜部の退化が顕著で陶邑 TK217 型式の古段階に相当する。6 は 12 と同型式と判断できる。11 の有段口縁杯は有段部がわずかな沈線のみで表現されており、同系統の壺では終末的な形態を示す。1～4 は上層から出土した。1 の壺蓋は環状摘みをもつ。2 の高台付壺ないし壺は口径底径比が大きく体部は直線的に外傾し、底部外縁に断面三角状のやや高い高台が貼付されている。3 は大型の在地産暗文杯で体部は大きく外傾し体部と底部の屈曲点は不明瞭であり同系統の壺では新相を示す。4 の皿は丸底で口縁部と体部の境は不明瞭である。旧段階の底面直上～新段階の下層出土の遺物には組列上の連続性を認めることができるが、上層出土の遺物には若干の断続があるだろう。時期 堆積状況と出土遺物の層位・形態から飛鳥～平安時代、おおむね 7 世紀中葉～9 世紀後半の時間幅が推定でき、7 世紀後半～8 世紀初頭に機能のピークを推定できる。備考 底面の掘削痕と堆砂層の状態から用水路としての性格が推測できる。

**4 号溝** (第 5 図、PL. 2) 位置 調査区中央部。 ( $X = 42.064$ ,  $Y = -74.871 \sim -74.877$ ) 重複 2 号畠より新しい。走向方位  $N - 86^\circ - W$ 。規模 検出長 [6.03] m、上幅 0.54 ~ 0.76 m、下幅 0.13 ~ 0.52 m、深さ 0.28 m。底面の標高は東端で 121.69 m、西端で 121.79 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土は As-B を含む。出土遺物 覆土中から土師器壺や甕、黒色土器塊、繩文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

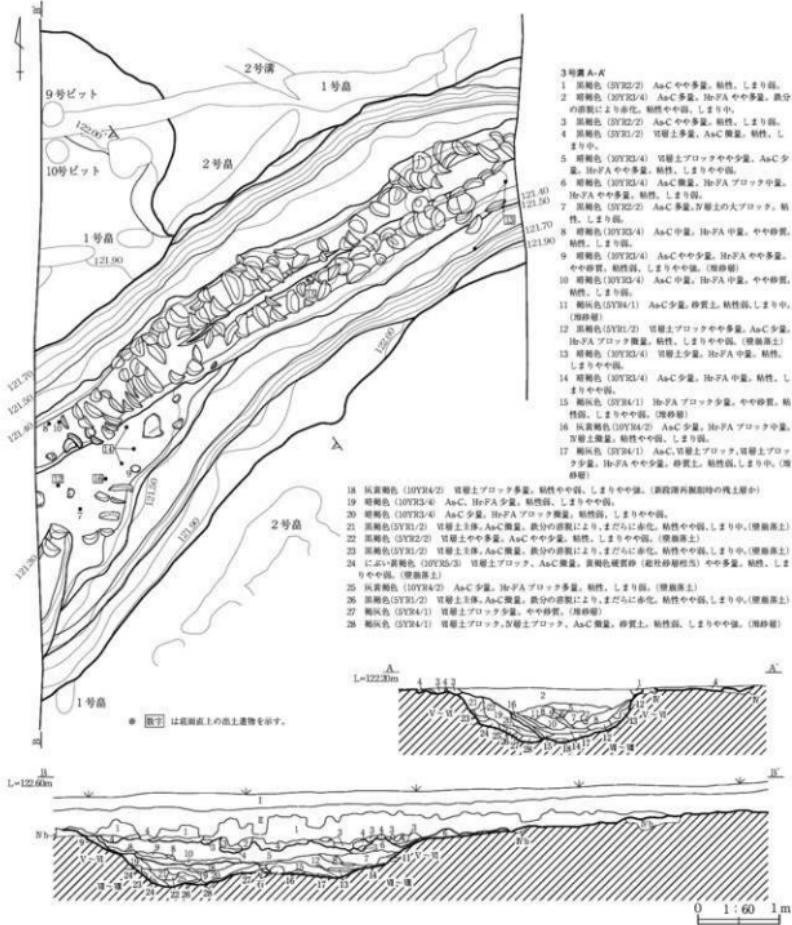
**5 号溝** (第 5 図、PL. 2) 位置 調査区南部。 ( $X = 42.059$ ,  $Y = -74.871 \sim -74.877$ ) 重複 1 号畠より新しい。走向方位  $N - 86^\circ - E$ 。規模 検出長 [6.01] m、上幅 0.91 ~ 1.26 m、下幅 0.21 ~ 0.30 m、深さ 0.48 m。底面の標高は東端で 121.38 m、西端で 121.42 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は逆台形状。底面はほぼ平坦。覆土は最上層に As-B を含む。以下の層には Hr-FA と As-C を含



第5図 1・2・4~6号溝

み As-B は含まない。出土遺物 覆土中から土師器と須恵器の壺や壺、繩文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から平安時代後期と考える。

**6号溝** (第5図、PL. 3) 位置 調査区南部。 $(X = 42.053 \sim 42.058, Y = -74.871 \sim -74.877)$  重複 1・2号溝より新しい。走向方位  $N - 59^\circ - E$ 。規模 檜出長 [6.96] m、上幅 0.46 ~ 1.26 m、下幅 0.18 ~ 0.28 m、深さ 0.46 m。底面の標高は東端で 121.39 m、西端で 121.37 m。形状等 北東から南西方向へ直線的



3号断面B-B'

- 1 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$ ,  $HrFa$  中量, 粘性弱, しまり中。(淀土化後の堆土上)
- 2 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  や多量,  $HrFa$  少量, 粘性弱, しまり中。(淀土化前の堆土上)
- 3 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$ ,  $HrFa$  プロックやや少量,  $HrFa$  プロックやや多量, 粘性, しまり弱。
- 4 にふく黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  プロック多量, 粘性の弱視により, まだらに分化, 粘性やや弱, しまり中。(堆肥土上)
- 5 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  や多量, 粘分の弱視により, まだらに分化, 粘性やや弱, しまり中。
- 6 黒褐色(3YR3/2) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  無量, 粘性, しまり中。
- 7 黒褐色(3YR3/4) 堆肥土プロックやや少量,  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  やや多量, 粘性, しまりやや弱。
- 8 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  無量,  $HrFa$  プロック多量, 粘性, しまりやや弱, (堆肥土上)
- 9 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  少量, 粘性弱, しまりやや弱。
- 10 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  中量,  $A_{sC}$  無量, 粘性, しまり中。
- 11 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  中量, 粘性, しまり中。
- 12 黒褐色(3YR3/2) 堆肥土プロックやや多量,  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  プロック少量, 粘性, しまりやや弱。(堆肥土上)
- 13 黒褐色(3YR3/4) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  無量, 粘性, しまり中。
- 14 黒褐色(3YR3/4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  中量, 粘性, しまりやや弱。
- 15 黒褐色(3YR4/1)  $HrFa$  プロック少量, 粘性弱, しまりやや弱。
- 16 黒褐色(3YR4/1)  $HrFa$  プロック少量, 粘性弱, しまりやや弱。(堆肥土上)
- 17 黒褐色(3YR4/1)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  プロック少量, 堆肥土,  $HrFa$  やや多量, 粘性弱, しまり中。
- 18 黒褐色(3YR4/2) 堆肥土プロック多量, 粘性やや弱, しまりやや強。(淀西湖湖側斜面の残土層上)
- 19 黒褐色(3YR3-4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  少量, 粘性弱, しまりやや弱。
- 20 黒褐色(3YR3-4)  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  プロック少量, 粘性弱, しまりやや弱。
- 21 黒褐色(3YR3/2) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  無量, 粘分の弱視により, まだらに分化, 粘性やや弱, しまり中。(堆肥土上)
- 22 黒褐色(3YR3/2) 堆肥土やや多量,  $A_{sC}$  やや少量, 粘性, しまりやや弱。(堆肥土上)
- 23 黑褐色(3YR3/2) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  無量, 粘分の弱視により, まだらに分化, 粘性やや弱, しまり中。(堆肥土上)
- 24 にふく黒褐色(3YR3/3) 堆肥土プロック、 $A_{sC}$  無量, 黃褐色硬塑砂(粘粒細砂)やや多量, 粘性, L2 やや弱。(堆肥土上)
- 25 黑褐色(3YR3/3) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  少量,  $HrFa$  プロック多量, 粘性, しまり中。(堆肥土上)
- 26 黑褐色(3YR3/3) 堆肥土多量,  $A_{sC}$  無量, 粘分の弱視により, まだらに分化, 粘性やや弱, しまり中。(堆肥土上)
- 27 黑褐色(3YR4/1) 堆肥土プロック量, 粘性弱, しまり中。
- 28 黑褐色(3YR4/1) 堆肥土プロック, 堆肥土プロック,  $A_{sC}$  無量, 粘性土, 粘性弱, しまりやや強。(堆肥土上)

第6図 3号断面

に向かし、両端は調査区外。断面は逆台形字状。底面はほぼ平坦。覆土はHr-FAとAs-Cを含みAs-Bは含まない。出土遺物 覆土中から土師器の壺が1片が出土したが、小片で時期不明のため図示しなかった。 時期 堆積状況から古墳時代後期～平安時代と考える。 備考 本跡を北東へ直線的に延長すると、一次調査1号溝へ繋がり、これらは同一の溝と判断できる。1次調査1号溝の覆土中からは須恵器有蓋高壺の壊部片が出土しており、壊部の形態は陶邑TK209型式に相当することから、6世紀末～7世紀初頭を若干前後する時期と判断できる。

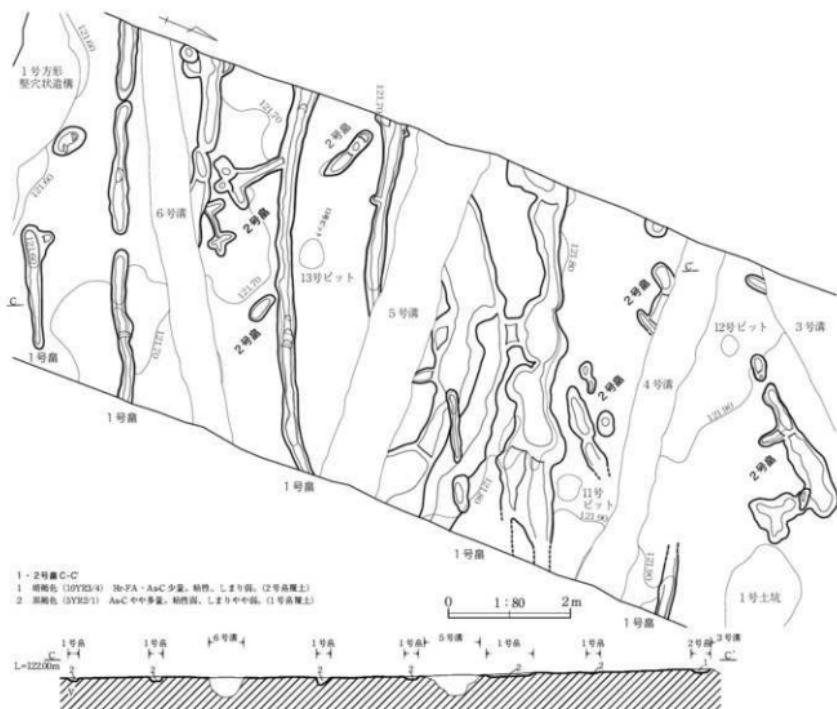
## (2) 崩

**1号崩** (第7・8・13図、PL. 3・4) 位置 調査区全域 ( $X = 42.053 \sim 42.080$ 、 $Y = -74.869 \sim -74.880$ )。重複 2・7号ビットより新しく、1・3・5・6号溝、2号崩、9号ビットより古い。6号ビットとの前後関係は不明。主軸方位  $N - 84^\circ - E$  (調査区北部)、 $N - 68^\circ - E$  (調査区南部)。規模 畦間溝の間隔は、 $1.46 \sim 1.68$  m、深さは $0.24 \sim 0.26$  m。形状等 15条の浅い畦間溝が確認できる。畦幅は広く、畦間溝の断面は弧状。IV層土を畦間溝の覆土にもつ一定間隔で平行する小溝群を一括したが、調査区北部と南部では耕作方向が若干異なり、微地形的・身体感覚的な実情に則して耕作方向が無意識的に規制されていると判断できる。地点によっては東西の畦間溝には直交する、南北の畦間溝と判断できるわずかな張り出しが観察できる。3・4号溝の間では畦間溝が大きく乱れて浅い不整形の崖地状を呈しており、これは部分的な耕作頻度の高さに起因すると判断できる。覆土 As-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。Hr-FA・As-Bは含まない。出土遺物 畦間溝の覆土中から土師器の壺・壺・壺の小片が少量出土した。1は畦間溝の底面から出土した。球胴壺の底部だが小片のため詳細は不明である。 時期 堆積状況と出土遺物から古墳時代前～中期と考える。備考 畦間溝に同質の覆土をもつ崩は一次調査でも確認されている。1次調査の崩は、耕作方向こそ本跡に類似するが畦幅は狭く、東西と南北の畦替えの痕跡は明瞭であり、栽培植物か耕作方法・頻度もしくはその両方に差異があると推測できる。

**2号崩** (第7・8図、PL. 3) 位置 調査区全域 ( $X = 42.053 \sim 42.080$ 、 $Y = -74.869 \sim -74.880$ )。重複 1号崩より新しく、1・3・4号溝より古い。主軸方位  $N - 44^\circ - E$ 。規模 残存状態が悪く不明瞭だが、畦間溝の間隔は $0.56 \sim 0.66$  m、深さは $0.06 \sim 0.08$  m。形状等 9～10条のごく浅い畦間溝が確認できる。畦幅は狭く、畦間溝の断面は弧状。北東から南西の畦間溝と、これには直交する北西から南東の畦間溝が、断続的だが格子状に観察でき、少なくとも2回以上の畦替えを推定できる。覆土 Hr-FAとAs-Cを含み、As-Bは含まない。出土遺物 畦間溝の覆土中から土師器の壺が少量出土したが、細片のため図示しなかった。 時期 堆積状況と重複関係から古墳時代後期と考える。

## (3) 方形堅穴状遺構

**1号方形堅穴状遺構** (第9図、PL. 3) 位置 調査区南端部 ( $X = 42.051 \sim 42.053$ 、 $Y = -74.872 \sim -74.877$ )。規模 堅穴部は東西 $2.26$  m × 南北 $[1.23]$  m、深さ $0.97$  m。テラス部を含めると東西 $[5.16]$  m。形状等 南部が調査区外のため詳細は不明だが、堅穴部の平面形は隅丸方形、断面形は箱状。 $\gamma$ 層を深く掘り込む。東西の上端は浅くテラス状に窪むが、底面に硬化面などは観察できなかった。堅穴部の底面にも硬化面などは観察できなかった。覆土 17層以下の中～最下層はAs-Bを含まず、VI層土の粗いブロック主体の黒褐色土層と、 $\gamma$ 層土の粗いブロック主体の黄褐色土層が互層を成しており、埋戻しと判断できる。上層の1～12層はAs-Bを多く含み、埋戻し後の窪地に堆積した層群と判断できる。出土遺物 上層から土師器の壺・壺・陶器の火鉢が少量出土したが、細片のため図示しなかった。 時期 堆積状況から平安時代後期と考える。備考 中層以下の堆積や底面の状態から、掘削後短期間で埋め戻されたと判断でき、 $\gamma$ 層土の採掘を目的とした採掘坑の可能性がある。



第7図 1・2号坑(調査区南部)

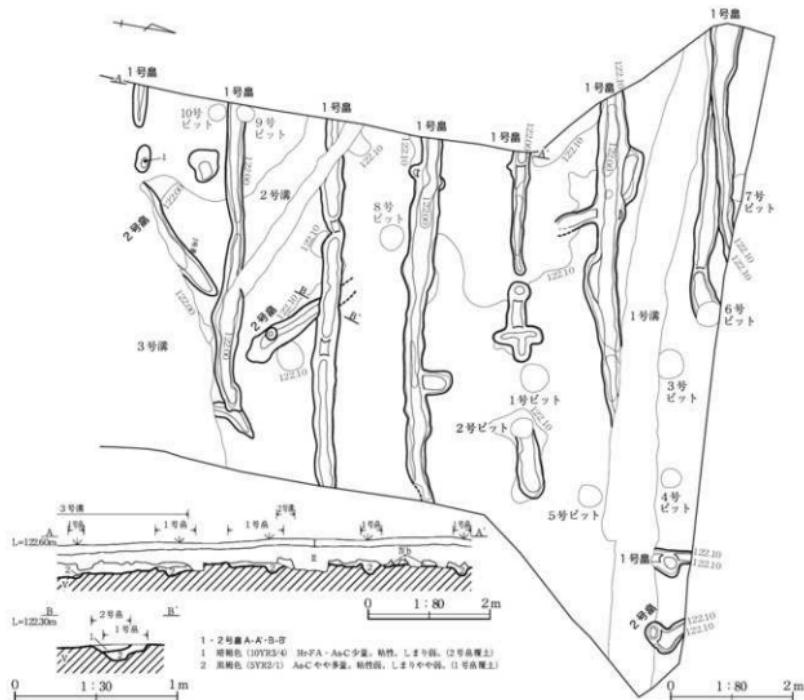
#### (4) 土坑

**1号土坑** (第10図, PL. 3) 位置 調査区中央部 ( $X = 42.067$ 、 $Y = -74.872$ )。規模 東西 [1.75] m × 南北 1.18 m、深さ 0.74 m。形状等 平面形は不整円形、断面形は不整形。底面には不規則なビット状の小穴が 6箇所観察できる。中央部の小穴が最も深く大きく、底面からの深さは 0.56 m に達する。覆土 上層は As-C を多く含む黒色土でⅣ層との分離は困難。中層以下は上層よりも As-C の混入量が少ない。Hr-FA・As-B は含まない。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。備考 形状から、根株の直下に直線的な深根の主根をもつ、立ち枯れした樹木痕跡と判断できる。

#### (5) ピット (第11図, PL. 3・4)

**1号ピット** 位置 調査区北部 ( $X = 42.077$ 、 $Y = -74.873$ )。規模 東西 0.45 m × 南北 [0.47] m、深さ 0.08 m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 上層には柱窓状に直径 2 ~ 8 mm 前後の発泡の良い輕石が純層で観察でき、粒径や色調・発泡の程度から As-C と判断できる (1層)。ただし、下層には As-C を少量含む黒色土の堆積が観察でき、層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 層序の反転から、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**2号ピット** 位置 調査区北部 ( $X = 42.077$ 、 $Y = -74.872$ )。規模 東西 0.29 m × 南北 0.36 m、深さ 0.10 m。形状 平面形は不整円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピット



第8図 1・2号坑(調査区北部)

1号方形六穴状連続A-A'

1 明褐色 (SYK3-3) V壁上アリ。As-C多量、粘性、しまり固。

2 明褐色 (SYK3-3) V壁上アリ。As-C多量、V壁上アリ、ブロッカ少量。

3 明褐色 (SYK3-3) As-Cやや多量、As-C微細、粘性、しまり固。

4 明褐色 (SYK3-3) As-Cやや多量、V壁上アリ、As-C少量、As-C微細、しまり固。

5 明褐色 (SYK3-3) As-Cやや多量、As-C微細、粘性、しまり固。

6 明褐色 (SYK3-3) As-C中量、As-C少量、V壁上アリ、As-C微細、しまり固。

7 明褐色 (SYK3-3) As-Cやや多量、As-C中量、V壁上アリ、粘性、しまり固。

8 黄褐色 (SYK2-3) As-Bやや多量、As-C微量、V壁上アリ、粘性、L=122.30m しまりやや固。

9 黄褐色 (SYK2-2) V壁上ブロッカ少量、粘性、しまり固。

10 黄褐色 (SYK2-1) V壁上多量、As-C微量、粘性、しまりやや固。

11 黄褐色 (SYK2-4) As-B中量、As-C微量、V壁上多量、粘性、しまりやや固。

12 黄褐色 (SYK2-1) As-B中量、V壁上ブロッカ少量、V壁上やや多量、

粘性、しまりやや固。

13 黄褐色 (SYK2-2) V壁上ブロッカ少量、粘性、しまり固。

14 黄褐色 (SYK2-1) V壁上多量、As-C、Hc-Fa微量、粘性、しまり固。

15 黄褐色 (SYK2-3) V壁上ブロッカ少量、V壁上アリ、As-C微量、V壁上少量、

粘性、しまりやや固。

16 黄褐色 (SYK2-1) As-B中量、V壁上ブロッカ少量、As-C中量、粘性、しまりやや固。

17 黄褐色 (SYK2-1) As-C、V壁上ブロッカ少量、V壁上多量、粘性、しまりやや固。

18 黄褐色 (SYK2-3) As-Cやや少量、V壁上ブロッカ中量、粘性、しま

り固。(V壁上アリ)

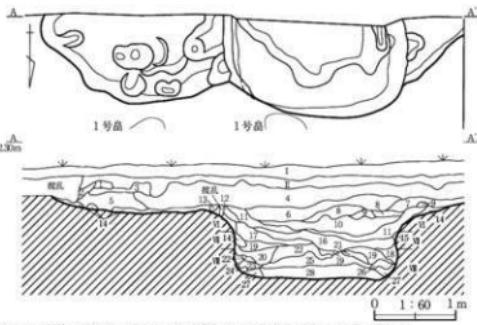
19 黄褐色 (SYK2-2) V壁上ブロッカ多量、As-C微量、粘性、しま

りやや固。(V壁上アリ)

20 黄褐色 (SYK2-1) V壁上ブロッカ少量、V壁上ブロッカやや少量、

As-C微量、粘性、しまりやや固。(V壁上アリ)

21 黄褐色 (SYK2-1) As-C微量、V壁上多量、粘性、しまりやや固。



22 にじ・黄褐色 (SYK5-2) 槌打土ブロッカや多量。As-C、V壁土少量。粘性、しまり固。(V壁上アリ)

23 にじ・黄褐色 (SYK5-3) 槌打土ブロッカ多量。V壁土少量。粘性、しまり固。(V壁上アリ)

24 黄褐色 (SYK2-2) V壁土ブロッカ中量。V壁土アリ。As-C微量。粘性、しまりやや固。(V壁上アリ)

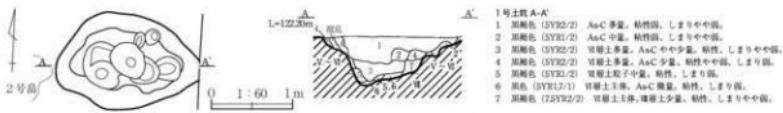
25 黄褐色 (SYK2-2) V壁土ブロッカ中量。V壁土アリ。As-C微量。粘性、しまりやや固。(V壁上アリ)

26 黄褐色 (SYK2-2) V壁土ブロッカ多量。V壁土少量。粘性、しまりやや固。(V壁上アリ)

27 黄褐色 (SYK2-2) 槌打土ブロッカ中量。V壁土少量。As-C、V壁土少量。粘性、しまりやや固。(V壁上アリ)

28 にじ・黄褐色 (SYK5-3) 槌打土ブロッカや多量。As-C、V壁土少量。粘性、しまり固。(V壁上アリ)

第9図 1号方形六穴状空洞連続



第10図 1号土坑

と同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**3号ピット** 位置 調査区北端部 ( $X = 42.079$ ,  $Y = -74.874$ )。重複 1号溝より古い。規模 東西  $0.47$  m × 南北  $[0.43]$  m、深さ  $0.07$  m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**4号ピット** 位置 調査区北端部 ( $X = 42.079$ ,  $Y = -74.872$ )。規模 東西  $0.26$  m × 南北  $0.29$  m、深さ  $0.14$  m。形状 平面形は円形、断面形は逆台形状。覆土 As-C を多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

**5号ピット** 位置 調査区北部 ( $X = 42.078$ ,  $Y = -74.872$ )。規模 東西  $0.36$  m × 南北  $0.36$  m、深さ  $0.12$  m。形状 平面形は円形、断面形はU字状で中段をもつ。覆土 1号ピットと同様で、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**6号ピット** 位置 調査区北端部 ( $X = 42.079$ ,  $Y = -74.875$ )。重複 1号畠より新しい。規模 東西  $0.39$  m × 南北  $0.46$  m、深さ  $0.53$  m。形状 平面形は円形、断面形は深いU字状。覆土 As-C を多く含む暗褐色土。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

**7号ピット** 位置 調査区北端部 ( $X = 42.079$ ,  $Y = -74.878$ )。重複 1号畠より古い。規模 東西  $0.46$  m × 南北  $[0.18]$  m、深さ  $0.25$  m。形状 平面形は不明、断面形はU字状を呈する。覆土 As-C の純層。調査区壁面の観察ではIV層を掘り込むことから、間接的だが1号ピット等と同様に、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象が生じていると判断できる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

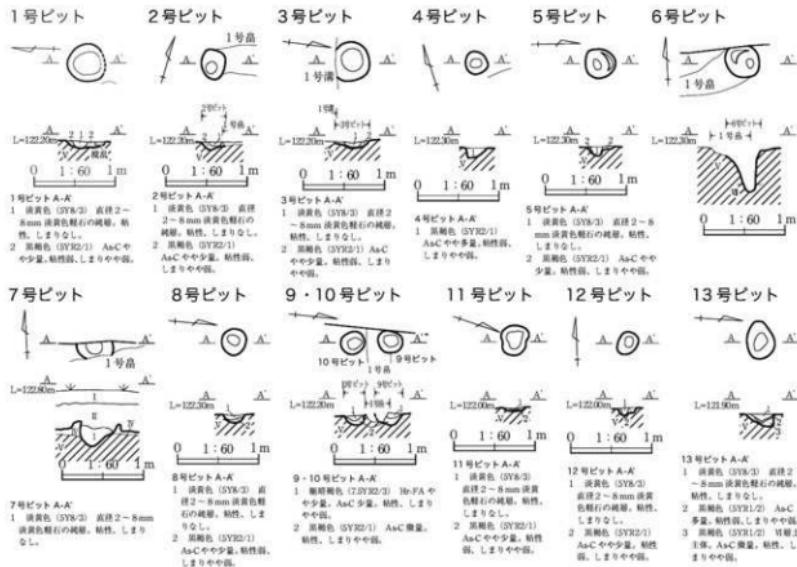
**8号ピット** 位置 調査区北部 ( $X = 42.074$ ,  $Y = -74.876$ )。規模 東西  $0.33$  m × 南北  $0.30$  m、深さ  $0.10$  m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**9号ピット** 位置 調査区中央部 ( $X = 42.072$ ,  $Y = -74.877$ )。重複 1号畠より新しい。規模 東西  $0.26$  m × 南北  $0.31$  m、深さ  $0.16$  m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FA や As-C を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

**10号ピット** 位置 調査区中央部 ( $X = 42.072$ ,  $Y = -74.877$ )。規模 東西  $0.27$  m × 南北  $0.28$  m、深さ  $0.13$  m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FA や As-C を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

**11号ピット** 位置 調査区中央部 ( $X = 42.063$ ,  $Y = -74.873$ )。規模 東西  $0.37$  m × 南北  $0.33$  m、深さ  $0.04$  m。形状 平面形は不整規円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-C の純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-C の純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**12号ピット** 位置 調査区中央部 ( $X = 42.064$ ,  $Y = -74.877$ )。規模 東西  $0.23$  m × 南北  $0.31$  m、深さ



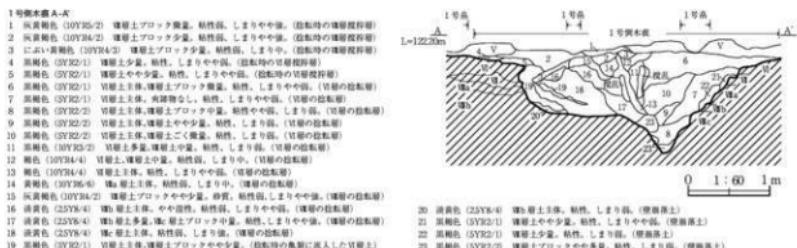
第11図 1~13号ビット

0.11m。形状 平面形は梢円形、断面形は逆台形状。覆土 1号ビットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ビットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

**13号ビット 位置** 調査区南部(X = 42.057, Y = - 74.875)。規模 東西0.46m × 南北0.35m, 深さ0.15m。  
**形状** 平面形は不整梢円形、断面形はV字形。覆土 1号ビットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ビットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

#### (6) 倒木痕 (第4・12図)

倒木痕はV層上面の1号島調査時に基本層序の乱れとして観察できたが、北トレンチのVI~VII層で2箇所の平面形を確認できた。いずれもVI層上面を構築面としV層はその上位に水平堆積する。1号倒木痕を試掘し、断面の観察を行ったところ、VI~VII層に相当する捻転層が観察でき、V層の捻転は観察できなかった。捻転の方向か



第12図 1号倒木痕

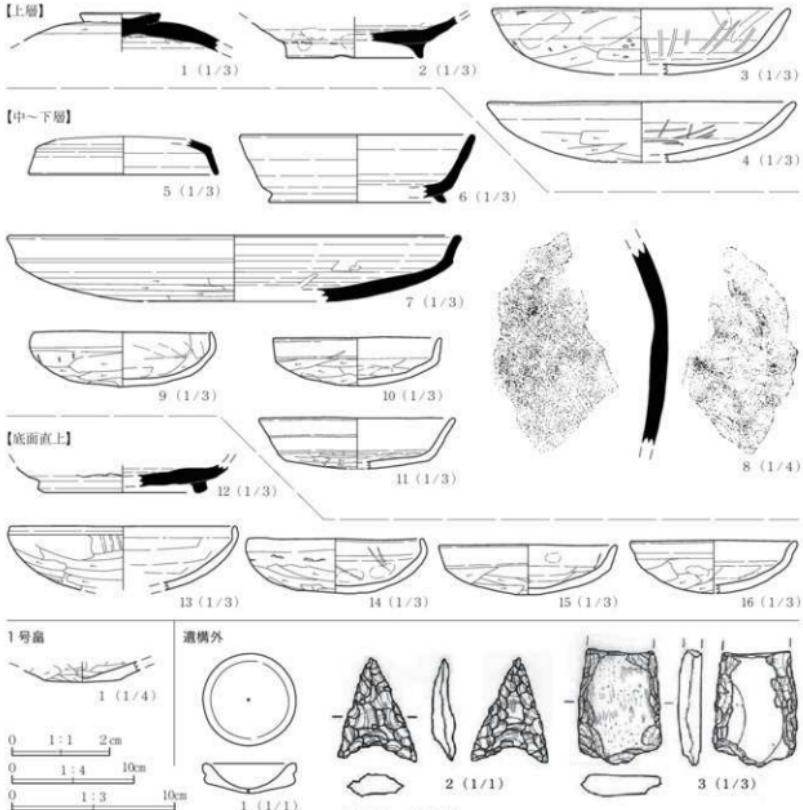
- 20 黄褐色 (SYR8-4) 砂質土層主層。粘性、しまりやや強。(埋蔵土)
- 21 黄褐色 (SYR8-1) 砂質土層や少量。粘性、しまりやや強。(埋蔵土)
- 22 黄褐色 (SYR2-1) 砂質土層少量。粘性、しまりやや強。(埋蔵土)
- 23 黄褐色 (SYR2-2) 砂質土層主層。As-C純層。粘性、しまりやや強。(埋蔵土)

ら1号倒木痕は北に、2号倒木痕は北西に倒れたと判断できる。いずれも微地形の傾斜とは逆を向くことから、その要因に火山災害や洪水は推定し難い。構築面や捻軸層の状況から縄文時代前期～弥生時代に形成されたと判断できるが、2号倒木痕は1号倒木痕の裾を切って形成されているので、若干の時間差が推定できる。

#### (7) 遺構外出土遺物 (第13図、PL. 4)

表土層から出土した1は集繕器で、煮沸した繭を織糸機で集繕する際、糸が塊になるのを防止して撚りをかけるための部品である。2の石鎌は南トレンチのVI層上位から、3の打製石斧はV層上面から出土した。その他、表土中から灰釉陶器皿1片や、調査地内で柱状脚部を有する高壙の脚部1片なども採集したが、細片や表面採集資料のため図示しなかった。

#### 3号溝



第13図 出土遺物

第2表 出土遺物観察表

#### 3号溝

| 番号 | 出土位置      | 種別、個體        | 口径 | 直径           | 高さ   | 断土            | 焼成       | 色調               | 形状、成・類形の特徴                                      | 残存状況・備考 |
|----|-----------|--------------|----|--------------|------|---------------|----------|------------------|---|---------|
| 1  | 3号溝<br>上層 | 集繕器 茶        | -  | 36.4mm<br>48 | [24] | 長右。石丸。<br>白色斑 | 要繕       | 外側：茶褐色<br>内側：淡赤色 | 外側：大舟足形軸轆アケリ強。軋み貼付。<br>内側：列脚子形軸轆アケリ強。           | 天井部1/4。 |
| 2  | 3号溝<br>上層 | 遺構跡<br>高壙脚部境 | -  | [82]         | [24] | 黑色系           | 心や<br>軸轆 | 内側：暗褐色<br>外側：灰褐色 | 外側：列脚子形軸轆アケリ強。軋み貼付。底部列脚軸切り後<br>無調整。<br>内側：列脚ナダ。 | 底部2/3。  |

|    |                      |          |        |       |                         |                     |   |   |               |
|----|----------------------|----------|--------|-------|-------------------------|---------------------|---|---|---------------|
| 3  | 3号唐上層                | 土加器<br>环 | (18.1) | -     | [3.8] 角閃石、黑色<br>鉄       | 軋質<br>相             | 外面：白縞部ヨコナ。体部下手～底部へラケズ<br>付。内面：底部～ビナゲ後、口縫～体部ヨコナ<br>付後、底質付。 | 1/4。<br>施道環灰坑。  |               |
| 4  | 3号唐上層                | 土加器<br>环 | (18.0) | -     | [3.7] 黒・白色鉄             | やや<br>良好            | に高い複数   | 外面：底～体部ヘラキジタ後、口縫ヨコナ。内面：<br>口縫～体部ヘラナゲ。底部ヨコナ付後、口<br>縫～体部放熱付文。底部焼成印付文。 | 破損。           |
| 5  | 3号唐上層                | 土加器<br>环 | (11.4) | -     | [2.1] 白色鉄               | 堅韌<br>灰色            | 外面：回転ヘラキシテ付後、口縫ヨコナ。                                       | 口縫部破損。  |               |
| 6  | 3号唐上層<br>高台付环        | (14.1)   | (10.7) | 4.2   | 小瘤、黑色鉄                  | 堅韌<br>灰色            | 外面：回転ヘラキシテ付後、口縫ヨコナ。                                       | 1/10。   |               |
| 7  | 3号唐<br>No.1          | 土加器<br>环 | (27.6) | -     | [4.1] 小瘤、黑色鉄            | 堅韌<br>灰色            | 外面：回転ヘラキシテ付後、口縫ヨコナ。内面：<br>回転ヘラナゲ後、底部の部分的なヘラナゲ。            | 1/5。  |               |
| 8  | 3号唐<br>No.3          | 土加器<br>环 | -      | -     | [16.4] チャート、小<br>瘤、白色鉄  | 堅韌<br>外内面に高い相<br>色鉄 | 外面：平行ヘリカキ付後、ナガ。内面：<br>同心円凸で施道、ユコナ。                        | 側面破損。<br>外縫にヘラ記号<br>「△」。  |               |
| 9  | 3号唐<br>No.7          | 土加器<br>环 | 10.8   | -     | 3.3 角閃石、チヤー<br>ト        | やや<br>良好            | に高い橙色。  | 外面：白縞部ヨコナ後、底部ヘラケズ。内面：<br>ヘラナゲ。                                      | 3/4。<br>北武系环。 |
| 10 | 3号唐<br>No.4          | 土加器<br>环 | 10.2   | -     | 3.0 角閃石、黑色<br>鉄         | 軋質<br>相             | 外面：底部ヘラキシテ後、口縫ヨコナ。  | 堅韌。   |               |
| 11 | 3号唐<br>No.21         | 土加器<br>环 | (11.7) | -     | [3.1] 角閃石、チヤー<br>ト      | やや<br>良好            | に高い相  | 外面：白縞部ヨコナ後、底部ヘラキシテ。内面：<br>ヘラナゲ。                                     | 1/5。          |
| 12 | 3号唐<br>No.23<br>高台付环 | -        | (9.4)  | [1.7] | 岩石、黒・白<br>色鉄            | 良好<br>良好            | 外縫付施道後、高台點付後、底部ユコナ。                                       | 有り付環。   |               |
| 13 | 3号唐<br>No.21-22      | 土加器<br>环 | (13.0) | -     | [3.9] 角閃石               | 軋質<br>相             | 外面：白縞部ヨコナ後、底部ヘラケズ。内面：<br>ヘラナゲ。                            | 1/5。<br>北武系环。   |               |
| 14 | 3号唐<br>No.8-10-15    | 土加器<br>环 | 10.7   | -     | [3.4] 角閃石、石英、<br>良好     | 軋質<br>相             | 外面：白縞部ヨコナ後、底部ヘラキシテ。内面：<br>無施道。                            | 堅韌。   |               |
| 15 | 3号唐<br>No.23         | 土加器<br>环 | (10.7) | -     | 3.1 角閃石、石英、<br>チヤー<br>ト | 軋質<br>相             | 外面：底部ヘラキシテ後、口縫ヨコナ。  | 2/3。<br>施道環。  |               |
| 16 | 3号唐<br>No.6          | 土加器<br>环 | (10.1) | -     | 3.2 角閃石、石英、<br>白色鉄      | 軋質<br>相             | 外面：底部ヘラキシテ後、口縫ヨコナ。内面：<br>底部ヘラナゲ。                          | 1/5。<br>施道環。  |               |

## 1号窟

| 番号  | 出土位置          | 種別、器種      | 口径  | 底径  | 高さ    | 助土           | 焼成   | 色調  | 形態、成・難易の特徴                                 | 残存状況・備考       |
|-----|---------------|------------|-----|-----|-------|--------------|------|---|--|---------------|
| 1   | 1号窟<br>外      | 土加器 窑      | -   | -   | [2.2] | 埋石、<br>灰・白色鉄 | 良好   | 外面：初期色<br>内面：系色   | 外面：ヘラナゲ。                                   | 底部灰坑。         |
| 遺構外 |               |            |     |     |       |              |      |   |  |               |
| 番号  | 出土位置          | 種別、器種      | 口径  | 底径  | 高さ    | 助土           | 焼成   | 色調  | 形態、成・難易の特徴                                 | 残存状況・備考       |
| 1   | 土外            | 泥器 集落器     | 1.9 | -   | 0.6   | 泥炭付 シ        | 堅韌   | 白色  | 製作。中に小孔。                                   | 完形。           |
| 番号  | 出土位置          | 種別、器種      | 底厚  | 幅   | 石材    | 重合           | 重合   | 重合  | 重合、成形の特徴                                   | 残存状況・備考       |
| 2   | 南トレンチ<br>No.1 | 石器<br>瓦類無系 | 2.1 | 1.6 | 0.5   | 磨擦石          | 0.9  | 左右脚輪は表面に低い形状の凹痕を有し、表面には筋状の突起を有するが直線的に並んでいる。内面の筋状の形態も若干の変化がある。 | 右脚輪は表面に低い形状の凹痕を有するが直線的に並んでいる。内面には筋状の突起がある。 | 完形。           |
| 3   | 研削器<br>(V型工具) | 石器<br>打製石器 | 7.1 | 5.2 | 1.4   | 安田岩          | 75.5 | 表面には自然な剥離と横長の线条がある。表面には直線的な筋状の突起がある。                          | 表面には自然な剥離と横長の线条がある。表面には直線的な筋状の突起がある。       | 局部指摘。<br>規則的。 |

\*各数値の単位はcm。重さはg。

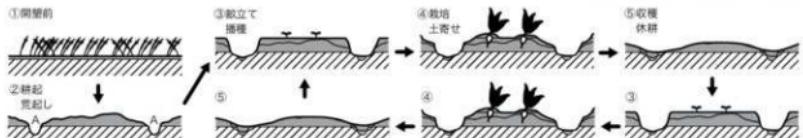
## VI 発掘調査の成果と課題

今回の調査では、想定した古墳時代の堅穴住居跡はなく、調査区一帯は該期の畠であった。また、畠の上層には飛鳥～平安時代の用水路と判断できる溝跡が横断していた。文化庁が“てびき”する報告書抄録の種別（文化庁文化財部記念物課2010）では「田畠」に分類できるこのような遺跡は、「集落」などに比べて見栄えは地味だが、一方で当時の一次的な生産活動が最も端的に現れる遺跡ともいえる。また、一般的な調査条件では確認すらままならない畠のような微細痕跡を、明確な遺構として調査がかなうのは、「火山灰考古学」が成立する当地の特性でもある。そこで本節では調査した畠と用水路を中心に若干の検討を加え、調査の成果としたい。

第3表 周辺遺跡における畠の軌跡と植物珪酸体比較（古墳時代）

| 遺跡名   | 遺跡名      | 種別     | 焼成      | 色調 | 形態、成・難易の特徴 | 残存状況・備考 |
|-------|----------|--------|---------|----|------------|---------|
| 三才寺TV | 高縫 (SK3) | HePA直T | 15～45   | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅰ   | 1号窓      | HePA直T | 50～60   | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅱ   | 1号窓      | HePA直T | 70～100  | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅲ   | 1号窓      | HePA直T | 150～200 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅳ   | 1号窓      | HePA直T | 60～70   | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅴ   | 1号窓      | HePA直T | 120～130 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅵ   | 1号窓      | HePA直T | 100～150 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅶ   | 1号窓      | HePA直T | 50～70   | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅷ   | 1号窓      | HePA直T | 100     | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅸ   | 1号窓      | HePA直T | 100     | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅹ   | 1号窓      | HePA直T | 60(なし)  | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅺ   | 1号窓      | HePA直T | 60～120  | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅻ   | 1号窓      | HePA直T | 100～120 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅼ   | 1号窓      | HePA直T | 100     | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅽ   | 2号窓      | HePA直T | 120～140 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅾ   | 2号窓      | HePA直T | 120～160 | ○○ | ●●         |         |
| 施設Ⅿ   | 2号窓      | HePA直T | 100     | ○○ | ●●         |         |
| 施設ⅰ   | 1号窓      | HePA直T | 100～120 | ○○ | ●●         |         |
| 施設ⅱ   | 3号窓      | HePA直T | 100～140 | ○○ | ●●         |         |

●多量 ○少量 □少量 ■少量△は施設の幅広の一部を示す。



■はAs-Cを含む耕土と理論上の組分量だが、現象としては組成不可能な“C 黒”的を示す。■は黒が土で、この直上が本遺跡の確認出となる。HePAなどテフラの降下に見舞われた場合は、いずれかの段階の太縫（表面）の状態で埋没し、確認される。耕作のサイクルは基本的に土によって形成された耕作土の範囲内で行われる、正一輪を繰り返す。本跡はこの段階に行われた A が残るする現象を示し、ゆえに確認された耕作土は最初段階で平行に行われる、一回目を示すものと推測できる。地方低干などにより後続的な発見しが度々必要な場合は正に履く。その後 A が残る現象を示す。

第14図 1号畠の残存状態

## 1 古墳時代前～中期の畠と樹木

畠 1号畠は畠間溝に As-C の混土を含む古墳時代前～中期の畠で、畠間溝間の幅は 146 ～ 168 cm と広い。現代のはたけでは幅広の畠は 100 ～ 120 cm 程度で、葉物野菜のはたけ全般に用いるといふ。これは播種や収穫方法など栽培種の特性と耕作効率によることがあるが、農業用マルチシートやビニールトンネルなど規格化された農業資材との相互の影響も考慮する必要があるだろう。

体験していない現代農法は参考に留めて遺構から考えよう。まず、本跡は As-C 混土の小溝が何条も規則的に確認できることで畠と認知できるが、これはテフラで直接覆われた畠とは比較条件に多少の差がある。すなわち 14 図のように、後者は火山災害の瞬間に起因した一回性を示すに対し、前者は耕作方法の段階に起因した一回性を示すといえる。つまり本跡の状態は耕作時の畠幅ではなく、実際には確認した畠間溝間の幅よりも若干狭い畠幅を想定する必要がある。この点を意識しつつ 3 表に、周辺で発掘された Hr-FA 洪水以前の畠で植物珪酸体分析が行われた事例を、いくつか集めた。畠間溝間の幅は 100 cm 以下の幅狭、120 cm 以上の幅広、その中間幅に大別でき、本跡は幅広に属する。計測値の振れが広いものは複数回の畠立ても考慮される。畠間溝の幅と、ある程度特定される植物珪酸体の中で栽培の可能性がある種類の検出傾向を見ると、幅狭では傾向がつかめないが、中間幅ではイネもキビ族（ヒエ属など）も検出され、幅広ではイネが優勢という結果になった。特に寺屋塚 I 遺跡 6 号畠では、少量のキビ族（ヒエ属など）に対して、イネは稲作の目安とされる数値に近く（註 1）典型的である。

本跡を含め幅広のものは、先述の比較条件を加味すると、能登分類（能登 1991）の a ～ 2 種か c 種（註 2）に相当し、c 種には植物珪酸体分析から稲の陳苗代の苗床の可能性も指摘される。今回の調査で同様の分析を行わなかったことが悔やまれるが、検討結果は氏の指摘に整合的で一考を要する。仮に該期をⅢ章-2 に記したような唐津川の付け替え前夜としたとき、本遺跡に近接する中島川の開析谷には三ツ寺堤の築堤後に似た谷水田の農業景観を想定でき、本跡をそのような生産活動との関連で考えることは、的外れとも言えないだろう。ただし周知のとおり、植物珪酸体分析の対象は主にイネ科の植物であり、蔬菜類には適さない。隣接する一次調査の畠は本跡と同時期だが、畠間溝間の幅は幅狭で、耕作方向を 90 度変更するような抜本的な畠替えが推定でき、同じ耕作地に別種の畠が並存している。時代は下り奈良時代の史料には、穀類と蔬菜類の栽培種だけでも 60 以上の名称があるが（閑根 1969）、そもそも古文獻を引き合いに出すまでもなく、少なくとも村落の次元において生存戦略に直結する食料獲得の選択肢は多様だったのだろう。



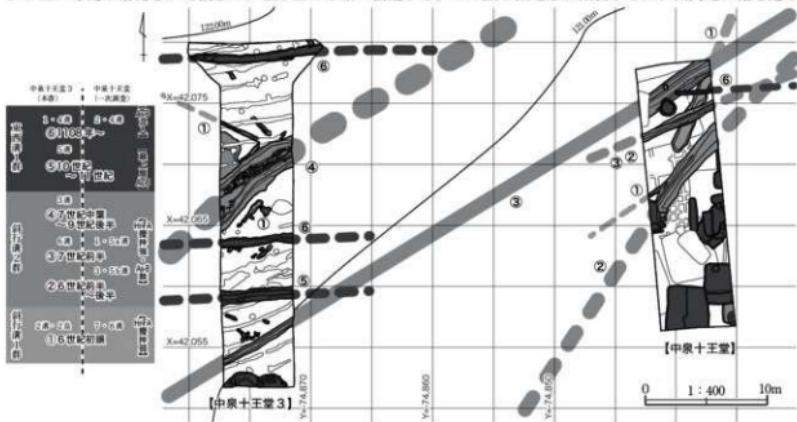
第 15 図 1 号土坑と根系の相関関係

**樹木** 1号土坑は形態から樹木痕跡と判断した。覆土は1号畠と同時性を示し、耕作地の中には木が立っていたか切株があったのだろう。樹木痕跡から樹種を判断するのは難しいが、根の張り方(根系)の図鑑(舛住1979)を頼りにできるだけ考えてみる。15図に示したように、土坑状の落込みの底部からビット状の小穴が複数分岐して中央の小穴が最も深くなるのは、おそらく根株の直下に明瞭な主根が伸び、なおかつ根株周囲の浅い深度に側根や細根が寄生して明瞭な根鉢を形成する根系だろうと推定した。このような根系に分類される植物にはコナラ属・クリ属・トチノキ属などがあり、参照した中ではBに示したコナラの標本がよく類似する。そこで、出土木製品の樹種データベース分析を参照してみると、北関東における該期の建築部材はクヌギ節やコナラ節が主体を占めるようであり(高橋2012)、植生としては整合性が確認できる。

畠の日当りを考えると本跡を切株と仮定する方が都合は良く、その場合伐採された主幹は建築部材として利用されたのかもしれないが、もはや検討の方法がない。ちなみに話をひとつ戻すと、「常陸國風土記久慈郡条」は「椎」を山の珍味の一つとしているし(関根1969)、県内では古墳時代のトチやコナラ属の種実も8例程度だが確認されており(洞口2008)、“どんぐり”のような堅果類の食物利用も充分に想定できるのである。

## 2 古代の用水路

**水源と流れ** 3号溝は7世紀中葉～9世紀後半の用水路と判断でき、調査地を北東から南西に流れる。17図には流路を想定するため、該期の遺跡分布に市街化以前の用水路網と微地形を重ねた。これを見ると、小地域の東を流れる天王川や中島川が主に灌漑するのは、より東のBである。本跡(1)の南にあるAは、中島川から分水するCと、その西の窪地から発するDの系統で灌漑される。Daは現在、3面コンクリートの用水路で、F以南の微高地にある住宅地の排水路を兼ねるが、よく見ると晴天続きで住宅地の排水路が枯れた日もDa以南は水が流れ、水路幅も広い。記録はないが地形的な条件も加味すると、Daは付近に多い扇端部湧水点の一つと判断できる。その位置関係から本跡は、Daを微地形の傾斜に平行して南西へ迂回させた用水路(Dc)と推測できる。本跡の流勢はさほど強くなかったと判断できるが、これは湧水を水源として地形に平行させたためだろう。この点、本跡はさほど有用な用水路とは考えにくい。一方、2の三ツ寺村前道遺跡では、北西から南東へ流れる大規模な用水路(2号溝)が調査され、Ea付近で賀沢川から取水した可能性が指摘される(権田2016)。その推定E系統はEb付近で本跡と合流する位置関係にあり、本跡はこの推定E系統を補完する用水路といえる。4の福島遺跡では、As-B直下の水田と水路網が調査され、E系統はこの辺りも灌漑するが、1885年頃の水田域はFに三ツ寺堀が築堤された後なのに250mほど東へ後退する。この点と微地形の傾斜からは、微高地の堀を通る



第16図 Hr-FA落下における溝の変遷

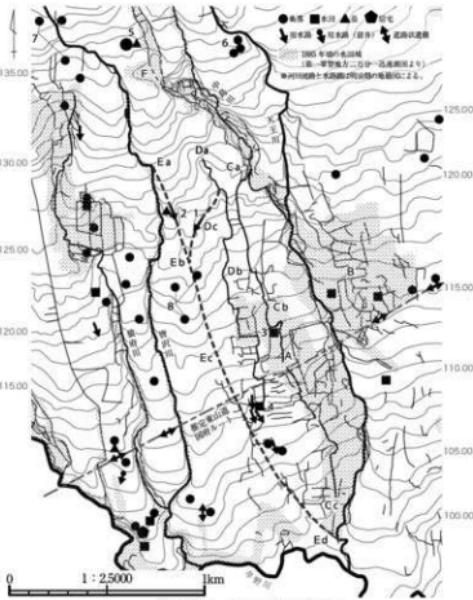
Ec の流路が推定できる。

**溝の変遷** 16 図には、本遺跡と一次調査の溝の接続関係と変遷を示した。3号溝と同じ方向性の遺構は、Hr-FA 直後の①の畠や溝にみえ、この火山災害が本遺跡の微地形や土地利用に何らかの制約を課したことがわかる。その後、6世紀後半～7世紀前半に、用途は推定できないが溝が流れ、7世紀中葉にその脈絡の中で本跡の用水路④が開削される。つまり本跡がこの地点に開削される背景には、少なくとも前段階での地形特性の認知という必然があったと推測できる。本跡は9世紀後半に機能を失うが、17図2の用水路も As-B を待たずに、数度の洪水で埋没する。推定 E 系統の取水源である唐沢川の上流では、17図7の保渡田東遺跡などで、7世紀後半～10世紀前半の度重なる洪水により各時期の住居跡が埋没しており、このような災害を通じて 17 図の推定 E 系統は機能を失い、これで補完した本跡も廃絶したのだろう。その廃絶で水田域は後退を余儀なくされるが、その後 D 系統はいつの頃からか、より低所を流れる Da - Db の系統に変遷し、17図 A の水田域を再形成したと推測できる。ちなみに本跡の廃絶後、本遺跡の溝跡は東西軸へ変化するが、その画期は 16 図⑤の5号溝の堆積にみるよう As-B の降下以前で、中世以降現在まで継ぐ地割りの萌芽は、少なくとも本遺跡周辺では As-B の災害を直接の契機としないことは一考を要するだろう。

**集落との関係** 本遺跡の南には、西側の微高地に椎原現原遺跡などの集落があり(17図8)、東側の低地には既述した Da - Dc と推定 E 系統が灌漑する水田域がある。一方、北側の高所に分布する堤上遺跡などは、Ⅲ章-2に記したように Hr-FA 直後の 6 世紀前半から營まれる拠点的な集落で(17図5・6)、7世紀にはさらに高所に足門村西古墳群などの群集墳をもつ。未だ分布の空白と議論の余地は多いが、これらの遺跡群を動態的に分析することで、河川争奪と自然災害の狭間にできた狹隘な小地域を舞台に、およそ南北の地形傾斜に規制された垂直指向の情景を描きつつ進んだ。古代におけるある程度自律的な小地域形成の姿が見えるのかもしれない。

注 1) 杉山二氏は、イボの種子標識(「椎原現原遺跡」)を骨粉 1 g 当り 5,000 個以上の密度で埋設された場合に、発芽が行われた可能性が高いと判断しており(杉山2000)。若狭郡では 2.1 ± 0.5 g の範囲で、5,000 個以上の密度で埋設されている場合、発芽率 60% の結果を得られた。注 2) 2 棚と糞糞井跡(5 号溝が粪糞井跡である。(中略) 創成は平均 12 cm 幅。平坦を作付け端は敷地端と想られる)。(鹿島1991 P90 L2-2)、「c 横2 (44) 黒井基準跡 B (36 号跡が典型的で、おおよそ 3.6 m × 0.8 m の複数個の作付け端を並列させて構成する特徴的な形の構である。(中略) ブラント・オーバル分析などによって極く薄(後) 明代であることが判明している)。(同P 92 L9-15)

引用・参考文献  
若狭1979「日本県別風土記」 諸文書新光社  
若狭町歴史編纂委員会2000「若狭町史 『上』 始古時代・中世・近世」  
若狭町歴史編纂委員会2002「若狭町史 『下』 近代現代」  
若狭町歴史研究会2004「若狭町歴史研究会」 石川県立歴史教育資料会合  
村山真一 2000「越前耕種地『ブランチ・オーバル』」『考古学と自然科學』③ 考古学と植物』 国成社  
跡木他著 1998「古代北武道における通路と土地利用—埴生城跡と尾上の考古学的事例を中心にして—」『汎水・利水遺跡を考える—人は水とともにどうつきあってきたか—』 第7回東日本埋蔵文化財研究会・第1回埋蔵文化財研究会・山陽歴史学会合  
早川勝1990「第六章 関ヶ原合戦と關ヶ原の農地」『關ヶ原合戦と關ヶ原の農地』 原始人会・農業空間学会委員会  
高橋義典 2010「北ノ瀬・甲斐城跡・桶木城跡・郡島城跡・山崩城跡・長野城」『日本の考古学 地下木製品用材データベース』 海青社  
田口千孝 2011「大河内に残された田畠跡、高瀬の裏を「名残の裏をつく」という『考古学×キャラバン 特集』 大河内に残された古河城跡 No.712 ニューサイエンス社  
黒井基準 1994「築作井跡」『古河城跡の研究』 5 号井跡と築作井跡の構造と水引水井跡の拡大について』『古代文庫』 第42巻第2号 古代学会  
黒井基準 1999「築作井跡」『古河城跡の研究』 4 畜生井跡と築作井跡 岐阜市教委  
日本歴史出版社 2010「『さと』の『まち』と『道』」『奈良編』 奈良市教委  
文化庁文化政策局企画部2010「象徴的街のアート」—整理・報告書編— 国立社  
文化庁文化政策局企画部2010「象徴的街のアート」—整理・報告書編— 岐阜市教委  
吉川信義 2008「若狭時代の水田耕作法」『若狭の歴史』 第20回 岐阜県埋蔵文化財調査会主催  
若狭町 2007「古河城跡の水田耕作法」『水田耕作法』 学生社



第17図 3号溝の流路想定



調査区全景 奥に榛名山（南東から）



調査区全景（北から）



1号溝 完掘状況（東から）



2号溝 完掘状況（南東から）



3号溝 完掘状況（北東から）



3号溝 削痕 完掘状況（北東から）



3号溝 土師器環（12図9）出土状況（北東から）



3号溝 土師器環（12図15）出土状況（北東から）



4号溝 完掘状況（東から）



5号溝 完掘状況（東から）



6号溝 完掘状況（北東から）



1・2号畠 完掘状況（北から）



1・2号畠 完掘状況（北西から）



1号土坑 完掘状況（北から）



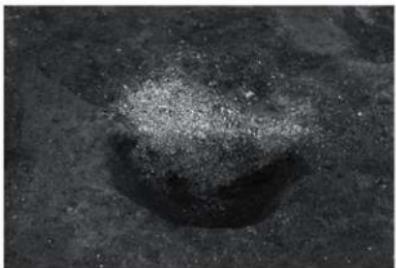
1号方形堅穴状遺構 土層断面（北から）



1号方形堅穴状遺構 完掘状況（北西から）



7号ビット 土層断面（南から）



8号ビット 土層断面（東から）

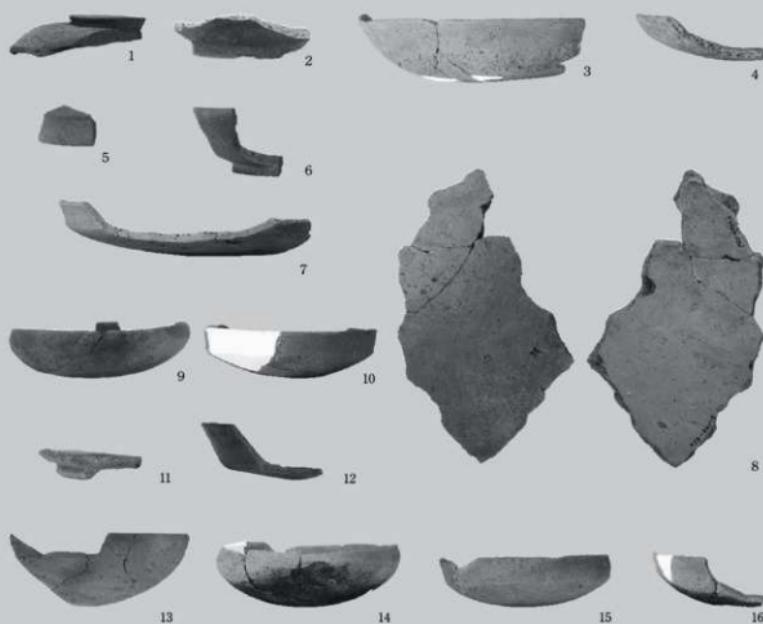


13号坑 検出状況（東から）



発掘調査風景（北東から）

3号溝



1号墓

遺構外



出土遺物

## 報告書抄録

|         |                            |
|---------|----------------------------|
| フリガナ    | ナカイズミジュウオウドウイセキ            |
| 書名      | 中泉十王堂遺跡3                   |
| 副書名     | 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書      |
| 卷次      | -                          |
| シリーズ名   | 高崎市文化財調査報告書                |
| シリーズ番号  | 第418集                      |
| 編著者名    | 中村岳彦                       |
| 編集機関    | 技研コンサル株式会社                 |
| 編集機関所在地 | 〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3 |
| 発行機関    | 高崎市教育委員会                   |
| 発行機関所在地 | 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1    |
| 発行年月日   | 2018年8月30日                 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地           | コード<br>市町村 | 位置<br>遺跡番号 | 北緯        | 東経       | 調査期間                      | 調査面積                 | 調査原因 |
|---------------|-----------------------|------------|------------|-----------|----------|---------------------------|----------------------|------|
| 中泉十王堂遺跡3      | 群馬県高崎市中泉町<br>字十王堂99-1 | 102020     | 742        | 36°22'23" | 139°0'8" | 20180418<br>~<br>20180522 | 182.96m <sup>2</sup> | 宅地造成 |

| 所収遺跡名    | 種別 | 主な時代    | 主な遺構                                     | 主な遺物                   | 特記事項                      |
|----------|----|---------|--|------------------------|---------------------------|
| 中泉十王堂遺跡3 | 田畠 | 縄文時代    | 倒木痕                                      | 2箇所<br>縄文土器<br>打製石斧・石鎹 |                           |
|          |    | 古墳時代    | 島溝<br>2面<br>2条<br>土坑<br>1基<br>ビット<br>13基 | 土師器                    | ・As-C混入黒色土を畠間溝の覆土に含む広畠の島。 |
|          |    | 飛鳥～平安時代 | 溝<br>1条                                  | 須恵器<br>土師器             | ・3号溝は用水路と判断できる。           |
|          |    | 平安時代    | 溝<br>1条<br>方形堅穴状遺構<br>1基                 | 須恵器<br>土師器             |                           |
|          |    | 中世以降    | 溝<br>2条                                  | 陶磁器<br>古錢              |                           |

### 中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年8月13日 印刷

2018年8月30日 発行

発行

高崎市教育委員会

〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1  
TEL 027-321-1292

編集  
印刷

技研コンサル株式会社  
朝日印刷工業株式会社





